

“He was a verray, parfit gentil knyght”:  
秋篠憲一先生へ送る言葉

大 沼 由 布

A KNYGHT ther was, and that a worthy man,  
And evere honoured for his worthynesse;  
He nevere yet no vileynye ne sayde  
In al his lyf unto no maner wight.  
He was a verray, parfit gentil knyght.

(Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, General Prologue より)

秋篠憲一先生が定年退職を迎えられてから、はやくも半年以上が経過した。研究室のネームプレートもはずされ、来年度には、秋篠先生が使っていた研究室を別の人が使うことになるのだろう。先生の研究室は私の研究室の隣であるが、そもそも、私の研究室がここになったのは、同じ中世英文学を研究する秋篠先生のお隣だからである。その立地を最大限に利用して、秋篠先生には、赴任以来の10年間、様々な質問や相談をさせていただき、大変お世話になってきた。この場を借りて、感謝申し上げたい。

そして、秋篠先生といえば、「仏」。学生にも、教員にも、職員にも、誰に対しても変わりなく、大変親切で思いやりのある態度を示されていたことは、先生に接した全ての人が同意するところだろう。それは仏と称されるにふさわしいと思えるが、中世英文学を研究する身として浮かぶイメージは、仏教よりも実は、ご専門とされるアーサー王と騎士道文学の世界にちなんだ“worthy man”または“gentil knyght”、つまりは「高潔なる騎士」である。

さらに具体的に言うならば、秋篠先生には、冒頭に掲げたジェフリー・チョーサーによる『カンタベリー物語』総序からの抜粋を捧げたい。これは総序の中で、登場人物の一人である騎士が紹介される場面である。この騎士が、高潔で他人に優しく、周りから敬われた模範的な人物であると述べている。こういった紹介には皮肉が込められているのでは、という見解もあるが、ここではそういった作品解釈には踏み込まず、純粋に英文の述べるところをくみ取りたい。そうしたとき、この描写は、まさに秋篠先生のお人柄を表すのにぴったりである、と思えるのだ。

お人柄以外に秋篠先生を“gentil knyght”とおよびする理由は、その業績にもある。先生のご業績を分類するならば、アーサー王関連のもの、中英語ロマンス関連のもの、その他、ということになるだろう。その他としては、サー・フィリップ・シドニーを扱ったものとチョーサーを扱ったものがそれぞれ一つずつ、まだキャリアの初期にあるだけで、これは例外といえよう。主要なご業績は騎士道文学研究であり、なかでもアーサー王関連のものが大部分を占めている。中英語文学の中でも花形の一つといえるであろう分野であり、先生は、複数のアーサー王研究者を育てられているし、卒業論文でもアーサー王関連のものを数多く輩出されている。

一口にアーサー王文学といっても、アーサー王は、アレクサンダー大王、カール大帝と並び、中英語ロマンスの三大英雄であり、それを題材とした物語は、数多くある。秋篠先生は、中でも中英語のアーサー王ものの集大成と称される、15世紀後期の作品、サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』(Sir Thomas Malory, *Le Morte Darthur*) に関する研究を多く残しておられる。

先生が特に関心を持っておられたのは、アーサー王の円卓の騎士を代表するランスロットであり、なかでもアーサーの王妃グウィネヴィアとランスロットとの間の愛だと考える。例えば、『同志社大学英語英文学研究』第28号(1982年)所収の「聖杯探求におけるLancelotの告白」では、ランスロットがグウィネヴィアとの愛という罪を告白する場面を、マロリーの『アーサー

王の死』を含む複数の作品を比較して分析し、マロリーが定説となっている作品以外のものも参照した可能性を指摘している。同年出版の『*Le Morte Darthur*』における“The Healing of Sir Urry”の一解釈』（『主流』第43号）でも、この世で最も優れた騎士のみが癒やすことができるという傷を負った騎士を、ランスロットが治癒するというエピソードを通して、グウィネヴィアとの愛に関連したランスロット像が扱われる。『同志社大学英語英文学研究』第89号（2012年）に掲載された「クレチアン・ド・トロワ作『荷車の騎士』の変容」では、マロリーの『アーサー王の死』とその典拠などを比較し、ランスロットが王妃を救うために罪人のように荷車に乗るエピソードの変遷を追ひ、エピソードの役割の変容とそこに描かれる恋愛観を分析している。『主流』第77号（2015年）掲載の「マロリーによる頭韻詩『アーサー王の死』の翻案とキャクストンの改訂」では、マロリーの意図・翻案の妙を、15世紀の印刷業者ウィリアム・キャクストンが自身で編纂した版を出す際、正確に反映させることができていたかどうかを、ランスロットの愛を軸にして論じている。

これらは、ランスロットに着目した論文だが、同じランスロットとグウィネヴィアとの恋愛でも、主体を変えた分析もある。例えば、『同志社大学英語英文学研究』第43号（1987年）所収の「MaloryにおけるGuinevere」では、分析対象はグウィネヴィアの方へ移り、ランスロットとの恋愛に触れつつ、いわゆる宮廷風恋愛の枠に収まらない王妃の姿を明らかにしている。また、『主流』第75号（2013年）掲載の「王妃グウィネヴィアの最期—マロリーと二つの原拠—」も、ランスロットとの恋愛を踏まえた王妃像の分析となっている。さらに、『同志社大学英語英文学研究』第81・82合併号（2008年）に収められた「“The Kynge Had a Demyng of Hit”—Arthurと妻の不倫」では、焦点をアーサー王に移して、ランスロットとグウィネヴィアとの愛が分析される。

このように見ていけば、秋篠先生の主な興味・関心が、この世で最も優れ

た騎士でありながら、道ならぬ恋に落ち、アーサー王の円卓と王国との崩壊を結果的に引き起こすこととなったランスロットと、その愛にあったことは明らかである。秋篠先生は、ランスロットに、脆く不安定な面があることや、グウィネヴィアとの愛が罪であることを認めつつ、最終的には、その愛によってこそ、ランスロットは優れた騎士たり得た、とお考えだったように思う。まさにその慈悲深いお人柄と深く関連した研究内容といえるのではないだろうか。

そのお人柄は、教育にも良く現れている。私の知る秋篠先生は、長い経験に裏打ちされ、多くの資料をご存じで、学生の選んだテーマにふさわしいものを、労をいとわずコピーして渡されていた。しかも、あとで分からなくならないように、毎回必要な書誌情報は全て手書きのメモをつけられた上である。こういった心遣いは、ご自分のゼミ生のみにとどまらない。私のゼミの学生がアーサー王関連のテーマを選んだときには、私はかならず秋篠先生にお話していた。すると、後日、先生は、あったこともない（勿論面識のある場合もあるが）私の学生のために、書籍やコピー資料をご用意くださっているのだ。受け取った学生たちは感動して、それらをきちんと活用して論文を書こうとし、私は二重の意味で助けられたものである。

思うにこういったことは、先生のバックグラウンドとも関わりがあるのではないだろうか。先生は、学部を卒業されたあと、3年ほど新聞社勤務を経験され、その後、大学へ戻ってくる形で、大学院に進まれた。本学英文学科では、こういった就業経験のある教員は珍しいのではないかと思う。資料に目を通し、整理し、必要なときに必要なところへ使いやすい形で渡す、というこの姿勢は、新聞に通じるものがあるように思うし、アカデミアの外の世界を知っているということは、学生指導、とくに就職をひかえた3~4回生を導くには、一つの礎石となったのではないだろうか。

最後に、実は私は3月に、近年秋篠先生に大学院でお世話になったメンバーを集めて、ささやかな送別会を開いた。丁度忙しい時期と重なってしまった

り、引っ越して遠くに住むメンバーもいたにも関わらず、皆、秋篠先生のためならば、とすぐに参加表明をした。また、記念品として、中世研究の徒らしく、羊皮紙工房に依頼して、羊皮紙作品を贈ることになったのだが、今は立派なアーサー王研究者となった一人のかつての教え子を中心に、皆、秋篠先生のためならばと、色々協力しあった。その結果、「まことの愛は5月のごとし」（因みに先生は5月生まれである）という趣旨のマロリーの一節を原語の中英語から引用したプレートをつけた、フランス語のアーサー王写本一葉の複製ができあがった。文字も絵も、先生がずっと探求してこられた、ランスロットとグウィネヴィアとの愛に因んだものである。羊皮紙工房の素晴らしい腕前もあり、全員自分もほしいと思えるような出来映えで、先生にも「家宝にします」といっていただけた。わたしたちの先生への感謝と尊敬の念を、少しは表すことができたと考えている。それと同時に、準備をしていく中で元教え子たちの様子に、worthy knightの残した功績を改めて確認できたともいえる。会自体の和やかな雰囲気とあわせ、全ては、秋篠先生だからこそ生まれたものだったと思っている。

秋篠先生、今までありがとうございます。どうぞお体を大切に、そして、任務と巡礼を終えられたKnyghtとして、和やかな時間をお過ごしください。